



『人生を変えるドラッカー』

吉田麻子 著

ダイヤモンド社 1500円＋税



半世紀も前に「メディアはメッセージ」と言ったのはマシヤル・マクルーハンだが、ネットやSNSなどの情報メディアが氾濫する時代に一つ気づいたことがある。

それは「言葉」ほど人の脳を直接刺激しうるメディアはないということである。確かに、感じがよくてキャッチーなデザインとコピーがあれば、何となく人は見てくれる。けれども、本当に心の芯に到達しうるのは、精錬され、鍛え上げられた言葉である。

しかも、言葉のいいところは、古くなるようで古くならないところにある。プラトンやアリストテレスの言葉は今読んで古くはない。松尾芭蕉や吉田兼好の言葉もしかりである。いや、むしろ古さというものが、いく時代ものフィルターをくぐり抜けかえって新鮮な響きをもって私たちの前に蘇って

くる印象さえある。近年のアドラー・ブームなどはまさしくそれであろう。

これは一つの物語である。しかも、物語として一つの世界を持ちながらも、同時にセルフマネジメントのみならず、私たちが生きる資本主義の世界への壮

大な問いをうちに含んでいる。

評者は電車に乗ったときに読みはじめた。やがて途中駅から猛烈に混み始めた。本を持つ手が目のすぐ近くにきて、半ばページの中に顔を差し入れるようなかっこうになったのに、読むのをやめることができなかった。そして、降車するときに、読了していた。やはりよい物語というものは

物語の力

シンプルである。それは一度ページを開いたら最後のページをめくるまで本を閉じさせない力なのだ。だとするならば、この本はまさしくよい物語の持つえもいわれぬ吸引力を秘めているのは間違いない。

確かに一つのビジネス小説の体裁をとってはいる。働くものなら誰でも一度は悩んだことがあるテーマー——たとえば、時間がない、上司と合わない、結果が出ない、将来が不安——など

が扱われている。

もちろんそれらも興味深いのだが、それ以上に興味深いのは、——言葉にすると当たり前なのだが——人間観察なのだ。しばしば小説や物語は現実とは違うから読みたくないという人がある。確かに間違っていない。小説はフィクションであって、ありていに言えば作り話だ。けれども、作り話だから

現実的でないというのはまったくの言いがかりである。反対である。むしろフィクションの中には、書き手の慎重で繊細な人間観察のみではなく、一つの世界観が凝縮的に表現されざるをえないからだ。

だからこそ、文学というジャンルはどんな時代であっても生き延びてきたし、今なお命脈を保っているのだらうと思う。そして、今文学のなかでもひとつわ中心的な位置にあるのが小説なのもまた事実である。

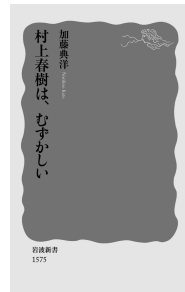
はてしない平原をわたる一陣の自由な風のような、古い井戸から今汲み上げられた清冽な水のような、やさしくアコースティックな読後感をこの物語は保証してくれる。ふつうのビジネス書では残念ながら手にすることのできない体験である。この世界ではジャンルの壁もない。あるのはよい物語であるかどうかだけである。ドラッカーもゲーテも同じ世界の住人なのである。



『村上春樹は、むずかしい』

加藤典洋 著

岩波新書 800円＋税



そもそも「『離れ』という言い回し自体がものごとを一面的に、誤った光の当て方をしているだけのように思われることが少なくない。

「活字離れ」「文学離れ」などが典型であるが、私の見たところでは、逆である。むしろ世の中はいっそう文学的情緒に溢れているし、何より誰もが自分にあふましい内面的な言語を必要としているように思われる。

ノーベル賞の季節がくると、何となく文学賞のゆくえが気になるというのは潜在的にはそのような事情もあるのだろうと想像する。

日本で毎年受賞予想の上位にくるのは村上春樹である。たえて国民小説という言い方がなさねなくなった現在にもかかわらず、次作を世界の読者が待ち受けているという希有の日本人作家なのは間違いない。

現役中の現役の作家ながら

も、世の中にはいろいろな村上春樹論が溢れている。なかでも、最も鋭い切り口で、しかもたんなる文学論を超えた妙味を与えてくれる思想家が加藤典洋氏による本書である。

タイトルに謳われているのが決して偽りでないのは数ページめくるとわかる。

というのも、たぶん私たちは村上春樹という作家に対して、(読んだ人もそうでない人も)不思議なほど軽い印象を抱きがちである。あえてそれを逆から読むとここまで深みがあるのだということをしていねいに教えようとしてくれている。

というのも、村上は、芥川賞や直木賞など日本の文壇の大き

な賞を受賞していない。

というか、日本の文壇と交流さえ持っていない。現代作家のなかで、村上自身が影響関係を明言するものはほとんどない。その意味では、村上は「文学業界」から意識的にデタッチメントすることによって、自らの作風を創造してきた作家である。そのようなこともあって、外面的には日本文学史のなかで村上を直接的に位置付けるのはとてもむずかしい。

本格的な現代作家論

そんな村上の創作の初期から現在にいたる約30年間を的確に考察の射程に収めたのが本書である。村上の入門書としてはやはりレベルは高いけれども、ある程度世界に親しみを持つ人にとってはまっすぐに入っていけるものがある。

わけでも、村上の作品とともに年を重ねてきた年代の方などは、そのことが顕著に言えるか

もしれない。

私などはいよいよ遅いほうに属すると思われるが、95年の阪神淡路大震災やオウム事件の近辺から、村上の作家としての活動が広がり、自覚を伴うようになつたあたりの分析はとても心にふれるところが多かつたように思う。

少なくとも、村上春樹は現代の日本人作家として、おそらくただ一人、近い将来ノーベル賞を受ける可能性のある作家としてよいかもしれない(ほかにいたら申し訳ないのだが)。

去年はボブ・ディランが受賞したことで世間の驚きを呼んだものであるが、そうでなくともネットなどを見る限り文学というものの容器が多様化しつつあるし、一義的に狭い枠組みに閉じ込めるのは無意味になつていくように感じる。

村上作品をいねいに読むことはもしかすると現代という時代の核にふれる行為なのかもしれない。



『定年後の勉強法』

和田秀樹 著
ちくま新書 740円＋税



書評にふさわしい本はないかなとタロー書房のなかをぼんやり歩いていたら、次のような帯に吸い寄せられて、気がついたらレジに並んでいた。

「世のため、人のためというのはこういう本のことだ。自分が勤めを辞める前に読んでいたら……と考える。」——外山滋比古。

これだけで決めたようなものかもしれない。

年を重ねるのは、山を下りていくのに似ている。登っているときは頂上というはつきりした目標がある。多少の無理も利く。

下山は違う。登り以上の慎重さと経験が求められる。にもかかわらず、遭難は下山時に起こりやすいというのも十分に理解できることだ。

やはり先達というものはあったいものである。人生の下山は誰にとっても初めての経験だが、必ずどの道にも経験者や助

言者という人たちがいてくれる。

しかも、下山とはいってもリタイアを意味するわけではない。昨今の状況からすれば、60歳で定年して悠々自適というわけにはいかない。経済的な面はともかくとして、60歳で何もしなくなったら、まずもってすぐ

に人として使い物にならなくなるのは目に見えている。

働き続けるのが理想だと頭ではわかっていても、いざ何をすればいいのかとなると自分一人では思いつきにくい。この本は、よきガイドになってくれる。

役に立つ助言は、実践からきているものでもあるし、一方で老年医学という専門分野からもきているというありがたいもの

人生下山の作法

でもある。著者は言う。

「長生きしたければ勉強をしなければいけない」「若いころと勉強法は逆になる」「定年後の記憶術」「定年後の思考術」「人生を充実させる勉強法」。

受験勉強や資格試験が山を登っていくアプローチとすると、定年後の勉強はたぶん下っていくアプローチなのだろう。自ずと勉強法は異なるものになって当然である。

わけても注意が必要なのは、

加齢に伴う衰えである。体力や記憶力が衰えるのはある程度しかたないが、本書で警告されるのは、「そんな話は知っている現象」である。

ある程度経験や知識がある高齢者にとって、「知っている」という箱に何でも入れてしまう誘引は押さえないものがあるはずである。

たぶん「知っている」からは

じめるのではなくて、「知らない」からはじめるのがポイントなのだろうと思う。年をとると子どもに戻っていくとも言われるが、そんな天衣無縫な年のとり方をしたいものである。

これまでの知や経験を生かすに当たっては、次の四つのパターン、「①これまでの会社経験を生かしたコンサルタント系賢人」「②心の健康、身体の健康の専門家系賢人」「③文化を再評価する宗教・歴史系賢人」「④隠れていた才能を発揮させるアーティスト（映画監督・小説家）系賢人」があげられている。

残念ながら評者はこのいずれも手にできるだけの才はないのだが、それでも希望をもつことならできる。

やはり定年を考えるのは40を過ぎたあたりが一つのポイントなのだろうと思う。

年をとると時間の過ぎるのが早くなるのは誰もが実感する身体的な事実である。死ぬまで学び続けたいと改めて思う。



『フィードバック入門』

中原淳著

PHPビジネス新書 870円＋税



フィードバックという言葉にかねてより反応してしまう自分がいた。とてもよく聞かし、自分でも使う。

けれども、いろいろな意味で使うために、どことなく焦点の合わない——万能ナイフみたいな——印象をずつともつていた。

この本は人材育成を主として扱っている本である。副題には、「耳の痛いことを伝えて部下と職場を立て直す技術」とある。

確かに一定の年齢になると、自分のことだけではすまなくなる。部下をはじめ、人にも成果をあげてもらわなければならない。

けれども、自分のことだけでなく大変なのに、部下をも育成するというのは口で言うほど簡単なことではないのはちよつとやってみるだけでわかる。

まして、現在の職場はかなり多様化していて、扱いにくいものになっている。かつての上司が部員であったり、外国人や異性ばかりという場合もある。

世ではダイバーシティの大切さが説かれ、それについて異論を挟む余地はないのだけれども、現実には「ダイバーシファイ」された職場というものは、思う以上に骨の折れるものである。本書はそのなかでも、もっぱら上司の立場からどのように人を

シンプルで深い

育成し、職場を生産的なものにするかを指南しており、そのためのツールとしてフィードバックを取り上げている。

考えるまでもなく、きわめてまっとうで正攻法のアプローチである。通常なら、フィードバックだけで本一冊書けるものなのかとさえ思われるかもしれない。

しかし、やはり深いのである。学問的知見もさることなが

ら、企業の現場の中に分け入り、ときにひりひりとした痛みさえ感じるほどの記述が続く。確かに、現実の職場では、トラブルは頻発するし、いつもにこにこ笑顔ではいられないことも多い。

それに、他者の自律性への信頼だけでは、どうあっても状況が打開できないことも少なくはない。そんなときは、単刀直入に耳の痛いことを伝えなければならぬのははつきりしている。

けれども、繰り返し述べられるのは、切られるほうが痛いのは当然にしても、切るほうも痛いという事実である。いや、自分が切られるほうがましなくらいに、時としてはつきりとしたフィードバックにはしかるべき胆力と方法論が必要なのだと思う。きつと本書を手にとる方なら、いつもフィードバックならしているし、その大変さもわ

かっているとされるかもしれない。実際にそのとおりなのだろう。

しかし、現実に行っているというのと、そのための適切なアプローチを知っているということはしばしば同じではない。

たとえば、「ロジカルに事実を通知できているか」「フィードバック内容を記録しているか」「嫌われるのもしかたない」という覚悟を持つ」などのことが語られるのだが、言われれば当然に思われることも、実際に事前に知っていることも、役立ちものがばかりである。何より気が楽になる。しかも、現実の組織でフィードバックを行っているマネジャーへのヒアリングなども上手にコラム化されていて、行き届いている。

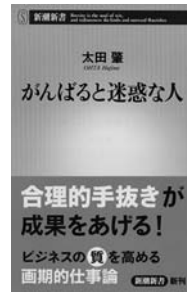
たぶん世界には方法知として体系化されるべきでありながら未着手のものが多くあるのだと思う。そんなもののほど、日常ですぐ役立つもののなかのかもしれない。フィードバックはその最たるもののだろう。



『がんばると迷惑な人』

太田肇 著

新潮新書 720円＋税



「がんばる」——。一日に何度聞かされるだろう。「自分ががんばらなきゃいけない人ほど人ががんばってと言うよね」とかつてタモリが話しているのをテレビで観たけれど、それは別のことである。

タイトルを見て、確かにそうだなあと考えた。誰より自分に対してそう思う。いくぶんライオンな感じのタイトルだが、どこまでも真面目な仕事論、チーム論である。

がんばるというワードには確かにひっかかるところがこれまでもあった気がする。著者は「がんばり主義」として、日本で蔓延する時代遅れの考え方とする。

確かに時代遅れだと思う。日本人ががんばっていたのはいつのころだったか。

たぶん戦後復興から高度成長、そしてあの「輝かしい」パブルの時代——。いずれもみんなが「がんばった」成果だった。

た。それもあって、がんばるというのは日本人にとつてイデオロギーを越えて一つの教義になつていくのかもしれない。誰もががんばれというプレッシャーに圧倒されながらも、みんなで何かに邁進する快さを知っている。がんばるというの

は、一人ですることではなくて、集団があつての精神的姿勢なのだと思う。

この本の基本認識は、この日本社会の集団主義がもはや生産性を保証しないどころか、逆機能にさえなつていくという点にある。

確かに、工場はコンピュータで自動化されているし、社員の大半は目の前のスマホで情報を

「がんばらないほう」が生産性は上がる

コントロールしている。一昔前は大量の書類のやりとりで数か月を要していたものが、下手をすれば地球の裏側とメールで瞬時にやりとりできるようになつている。

自分自身を振り返っても、細かいことはずいぶん手を煩わせる必要がなくなっている。楽になつていく。

そればかりかSNSのように組織を介さず直接発信したりなども日常の一部となつていく。

これらは物資を価値の源泉にしているわけではないから、量的な転換というよりも質的な転換である。

ならば、質的なことをどう有効に行うかに力を傾けなさいというのが主張のポイントとなる。つまり、時代の原則が変わつたにもかかわらず、戦後の美徳を貫徹せしめようと、「迷惑」なのは当然すぎるほど当然だ。

「いかに早くいかに多く」が勝負だった時代から、「いかに美しくいかにやさしく」が勝負になつていくのだろう。

後者は質であるから、人間にしかできない。だからといって個人プレーのみということではない。反対である。質の探求こそがチームプレーでなされるべきことである。

そのためには同質性ではなく、異質性を核にしたチームが意味をもつようになつてくる。たぶんまだ日本社会は質を中心とし、かつ異質性を利用するような組織の運営に慣れているだけなのである。なぜなら、同質性やがんばり主義で生産性を代用してそれで成功してきてしまったからである。

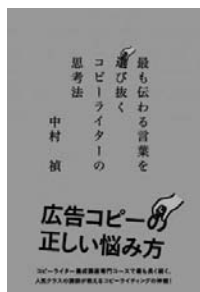
やっかいなのはがんばりというのとは心の中にしつこい規範として残っているということである。強固に内面に築かれた壁は取り払うのがなかなかむずかしい。たぶん日常の小さな行動以外に壁をなくすアプローチはないのだろう。



『最も伝わる言葉を選び抜く 「コピーライター」の思考法』

中村 禎 著

宣伝会議 1700円＋税



二昔以上前のバブルのころ、「コピーは詩を超えた」みたいなことが言われたことがあった。経済的な繁栄が、確かにコピーライティングの価値を大きく前進させたのは間違いないだろう。

現在、コピーを文学だと言う人はいない。むしろそれくらいに、時代は現代になって、通常の人々が、自らの言葉を公共空間に発することが当たり前の時代になっているということでもある。コピーライターによる本である。コピーなど自分には関係ないなどというのは一昔前の話、今は誰もが「言葉づくり」に日々関わらざるをえなくなっている。

言葉は価値の源泉

もちろん、著者の代表的な仕事や作品、そのプロセスまでについて書かれている。言葉というものをどう商品として価値あるものにするか、その考え方が鮮やかに示されている。しかし、それ以上に私が切実に感じたのは、現在ある多くの仕事とコピーライティングとの共通性である。たぶんコピーライティングが

一つの職業として成立したのは、それほど昔のことではないだろう。かつては、商品をつくって販売する人たちが、自社でコピーを考えていたはずである。だが、私たちが現在広告として目にするコピーは、「プロ」によって考えられたものである。考えてみれば、ツイッターやブログなどなど現在氾濫している「言葉」のなかで、商品としての言葉を紡ぎ出すのは大変なことと言わざるをえない。

本書でもネット上に流れる言葉とコピーとの関係性には慎重な配慮が払われている。そして、それ以上に配慮が払われているのは、書き方ではなく、書くときの姿勢という向き合い方みたいなものである。昨今、世には読み切れないほどの本があり、ウェブ情報がある。知識は大量に流通している、とうてい消費しきれないほどの規模に達している。

そのなかで、しっかりと価値を生み出しているのは、つまるところ、考え抜かれたもの、すなわち、思考の力なのだということに思いいたった。コピーライターが生み出すのは、ときには数文字の言葉である。数文字であつても、ときにすぐれた映画を見たときのように、心の中にカラフルで情感豊かな映像がほとばしることがある。凝縮された言葉にはそれだけの力があるのだ。あるいは、そこまで言葉にかかわる活動はしていないという方もいるかもしれない。だが、コピーライターの「思考法」はつねに参考になる。なぜなら、言葉とは一つの錬金術である。言葉そのものが商品となり、価値の源泉となる。それがこの世界の一つの現実である。これは知識社会の基本原則そのものであつて、言葉という高度な人間活動が価値創造の源泉たりうるということである。興味深くはないだろうか。



『40歳を過ぎたら、働き方を変えなさい』

佐々木常夫著
文響社 1420円＋税



評者は40歳を過ぎて数年になる。いろいろ思うところがあった——いろいろ思うところのない年齢などあるのか——、この本を手にとってみた。佐々木常夫さん——。著名な著者とのことだが、本を読むのは初めてだった。

読んでみて、学べるところがあつたかと聞かれれば、大いにあつたと思う。

会社人生というと不自由の多い生活が想像されるけれども、ちよつとした工夫や、考え次第で、それはとてもいろいろなことを教えてくれる。

書き手の人柄のよさや温厚さとともに、そんな成熟した知恵が具体的な事例とともに、伝わってくる、そんな一冊である。

誰もが、40歳までは無我夢中である。仕事は覚えなければならぬし、人間関係の作法も身に付けなければならぬ。山のようにやることがあつて、多くは疲弊する。とにかくがつがつ

したりあくせくしたりしがちで、それもある程度はしかたがないように感じる。

しかし、40歳を過ぎて同じことをしてはいけないう。この警句はとても心に響く。

「略す」技術

く。確かにそのとおりだし、生き方は常に同じである必要などない。40歳で生き方を変えよというのはとても重たいメッセージだ。

にもかかわらず、話されるのは、とてもライトで清涼感のあるものばかりである。

たとえば、次のようなものだ。・周囲とは「さっぱり」と付き合

・いやな上司は「人間だからしょうがない」で許す。
・生産性の低い飲み会は略せ。
・新聞は読むな、眺めよ。
・家族への愛は「家事」で表現する。

目にしてみるとみんなシンブルなことである。

読んでいて、もつと若いころに知っておけばよかったと思う人も少なくないかもしれない。知ってもあまり役に立たないと

いうか、価値が身に浸みない種類の知恵というものもあるのだ。この本に書かれているのはその種類の情報である。

経験という風雨に洗われなければ見えてこない風景というのが確かにあるのだ。そのことに思いがいたる。

いや、それ以上にこれまで重ねてきた苦労が、無駄ではなかったのだという気持ちになっ

てくる。

語り口が絶妙に利いてくるのがその点である。なぜか、自分でも今すぐにできそうな気がするのだ。

これはやはり、書き手の「徳」というものだろう。あるいは「愛」と言ってもいい何かかもしれない。

同じことを別の著者が言っても、たぶんあまり説得力がないかもしれない。

少なくとも、ちよつとした自慢のように聞こえるところが出てきそうなのだが、この本にはそのようなものはまったく感じられない。漂う空気が終始どこまでも清澄なのである。

しかもこの本の説得力はとても静かである。

穏やかに力づけてくれる。一冊の本で人の考え方が変わることはそう多くはない。

けれども、時々この本のようにな、とても静かな言葉を通して、著者のたたずまいから何かを教えてしまうという本があるものである。



『発想法——創造性開発のために』

川喜田二郎著

中公新書 720円＋税



昔のベストセラーを手にする
と時々はつとするような何かが
下りてくることがある。

同時に、人が追い求めるもの
は、時代によっていくらかのま
だらはあることも、大きくは変わ
らないことにも思いがいたる。
約半世紀前にベストセラーとな
り、世を圧するほどに広まった
知的生産の技術、それがKJ
法である。

このような「古典」が現代に
おいて復刊されるのはとても興
味深いことだし、手にとってみ
ることで、半世紀前の人々に対
話をするような、えもいわれぬ
感慨をもつことになる。

著者は高名な文化人類学者で
あり、知の達人である。

著者のイニシャルを冠するKJ
法は、実際に内容を徹するほ
どに、古さを感じさせず、むし
ろみずみずしいほどの知の奔流
に触れた思いを抱かせてくれる。
その実質的なアプローチや方
法などについては、ここではふ

れない。それは一読して関心が
あれば、全面的にとはいわずと
も、役に立つところを採用すれ
ばよいと思う。

それよりももっと大切で、時
代を超える叡智はほかにある。
それは知に対する根本的に謙
虚で、ひたむきな姿勢にあるの

ではないかと思う。

特に、KJ法をめぐる知の背
景を書いた第1章の「野外科
学」についての説明は、半世紀
前よりも、むしろ現代において
その説得性をさらに高めている
ように思われてならない。この
章だけでもぜひ一読いただきたい
と思う。

では、野外科学とは何なの
か。著者は知のありようを、書

名著 復刊

齋科学など、いわゆる現実の観
察を経ずして成立してきたもの
と対置させる。そこで重要な
は文献と推論であり、結果とし
て極端な定量化や観念論が現実
の知を圧倒し、優位を維持して
きたのは無理からぬところであ
った。

もちろんそれらの学問はとて
も重要であるし、役にも立つ。
だが、そこに野外科学の考え
方、すなわち実際の観察と経験
を重視し、しかも自然か人工物

かを問わず、ありのままの現実
に真率に対峙する姿勢の大切さ
を説く。

たとえば、著者は、「経営の
コンサルタントがある企業、職
場を研究する。その職場は、そ
こだけにしかない野外的自然で
あり、個性的な世界である」と
いう。

この一回限りの現象の中にひ
そむ固有性に目をとめるところ

が、KJ法の基礎をなす大切な
考え方のように思われる。
現在もなお、さまざまな発想
法や仕事術があるけれども、お
そらくはKJ法ほどの卓越した
ビジョンをもつものはほとんど
ないに違いない。

方法については高度にアナロ
グであって、現代人からすれば
とてもまどろっこしく面倒に見
えるに違いない。確かに、情報
ツールが格段の発展を見る現代
にあつて、はるかに効率的なア
プローチも可能なものかもしれな
い。あるいはAIのように、生
身の人間を介することのないア
プローチすら考えられるかもし
れない。

だが、つまるところ、情報と
は、それらを総合しなければ役
に立つ知識に変換されることは
ない。

おびただしい方程式を無限に
解こうとも、一つの総合的思考
を得ることは容易ではない。

「今だからこそのわかること」
が、どれだけあるかが名著の条
件なのだろう。



『定年後——50歳からの生き方、 終わり方』

楠木新著
中公新書 780円＋税



特定の年齢に偏るのではという批判もあるかもしれない。「いや、僕はまだ40歳になつてないんで、関係ないし」。ちよつと待ってほしい。定年後とは、定年になるずっと前から考えておくべき課題であるためだ。

定年後を扱うにも、実に多くのアプローチがある。政治問題ともとらえられるし、行政や福祉の問題とも考えられる。むしろ社会の問題であり、何より経済の問題である。だが、ひとつ忘れがちなのは、定年とは誰とも「個別的に」関係をもつ事柄ということである。

生きていれば誰でも年をとる。だが、年をとるという事実ほどしばしば放念されがちなものはない。

現に私の知人でも、あるとき突然定年になった気がすると言っていた人が何人かいる。誰も彼らを笑うことはできないだろう。誰にとつても、定年

など未来のどこかにあるものにするにすぎないからだ。

最大の魅力は、その低い目線と謙虚なスタンスである。どの話題も、ほとんどが一人称かそれに近い目線で語られていて、

「助走」を今はじめる

安心感がある。その生のヴォイスが読む人を安心させてくれる。

ポイントには、定年を迎えた後の人生は、人が思う以上に重要、それどころか、人生では致命的な意味をもつということである。現に今、そのことを日々実感している定年後の人々が

日々自分の居場所を求めている。教えてくれることは実にシンブルだ。定年後とは、定年前の

助走、すなわち現役のときにどう準備するかの問題でもあるということである。

そして、その準備次第では、定年そのものを無効化できるかもしれない。印象的な部分を引用しておこう。

「元氣な人の共通項を探ってみると、教育関係に取り組んでいる、若い人に何か役立つことを持つている、若い頃の自分をもう一度呼び戻している、などを挙げることができそう。ま

た会社の仕事だけではなく、それ以外の何かに取り組んでいる人という条件も重要ではないかと感じた次第である」

ほんの少し前までは、会社や役所が人生のリスクの防波堤になつていたし、多くの場合、終身雇用が機能していた。平均寿命もさほど高くなく、そもそも老後という期間自体が長くなかった。

だが、現在は街ゆく人を一目見るだけで、中年以上の人々が社会の中心になったのがわかる。多くは元氣で若々しく、社会との接点を求め、居場所を求めている。

つまるところ、それらは行政や経済などの制度の問題というよりは、一人ひとりの生き方の問題なのだ。しばしば「第二の人生」とも言われる。

本書が言うように一次方程式で人生を解ける時代ではない。ならば、なるべく早くから第二の人生の助走を開始するほどに現実的な作法はないと言つてよいだろう。

そして、そのアクセスポイントは、極度なまでに現実的でささやかなものでなければならぬ。地域活動といつても一様ではなく、しかも簡単ではないに違いない。ならば、時間をかけて、ゆつくりとささやかに進めていくほかにないではないか。そんな大事なことを示唆してくれる一冊である。



『他人をバカにしたがる男たち』

河合 薫 著

日本経済新聞出版社 850円＋税



健康社会学という学問があるとは知らなかった。とても実践的な学問のようだ。

何しろ、日々のごくありふれた事柄を取り上げてくれる。何気なく思っていた違和感や疑問についてねいに答えてくれる。とか、根底にある心理的なメカニズムの端緒を教えてくれる。健康というからには、病理もあるのだろう。

駅やコンビニなどで大きな声を出している中高年を目にする。「年甲斐がない」と昔は言った。

いいせりふである。けれども、今ではあまり聞かれないせりふである。

その昔、先輩から、「オレは聞いてない」という一文を口にする人がいたら気をつけろと忠告されたことがある。とても役に立つ忠告だったと今でも思う。べつに何かを教えてあげようというのではなく、自分の存在を示したいただけなのだ。理屈と

いうより感情の問題である。

幸いと言うべきか、何が彼らにそうさせているのかが、よくわからなかったのだが、この本にはとてもよく整理し、説明されている。

そればかりか、将来において

「意識する」を促してくれる本

とが示されている。

誰でも年をとる。10年たてば、30歳の青年も40歳になる。

20年経てば50歳になる。

けれども、年の重ね方は決して一様ではない。時間のもつ意味というものは本当に人によって違うのだと実感する。

いい年をした政治家が、秘書の身体的特徴を金切り声で罵倒する音声が全国で流れる時代で

ある。

小学校ではいまだにあの真似が流行っているというから、国民のロールモデルどころか、害悪の源になっている。

もつばら、男性が思い起こされるけれども、あの事件から、女性も十分に資格があるのがよくわかる。

「老害」化していくか、慕われる人になるか、たぶん日々の重ね方に理由があるのだろう。それならば、なるべく早い段

階で、老いていく自分、思考が固まっていく自分を少なくとも「ちよつとだけ」意識するだけの心の余裕があつていい。この本はそのための心の隙間をつくってくれるような書き方がなされている。

今後長く働いていく人々ほどこのことは当てはまるだろう。「そんな考え方をしたことがなかったな」とか、「たしかにそ

んなふうな見え方もあるんだな」といった具合に、いろいろな角度から、日常的な出来事や、現象を解説してくれる。それともう一つ。

本書を読んで、当たり前といえば当たり前ながら、女性と男性ではこの世界をかなり異なつたふうに見ているということに気付かされた。

日々私を含む多くの人は、この世界が誰にとつても同じように見えているように感じてしまうものである。

だが、はつきり言つて、それほどたちの悪い錯覚もない。人は性別をはじめ、まったく置かれている環境は違うし、負っているものも違う。そんな人々がこの世界を同じように見ることもなだれだ。

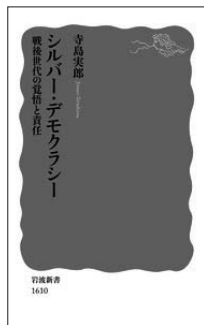
たぶん無関心は老害化の重要なプロセスの一部なのだ。そんな自覚のある方なら、ぜひこの本を手にとって学んだほうがいい。あるいは間に合うかもしれない。



『シルバー・デモクラシー』 戦後世代の覚悟と責任

寺島実郎 著

岩波新書 760円＋税



私は団塊ジュニア世代ということもあって、全共闘世代を視野に収めながら社会人生活をしてきたと思う。少なくとも頭の片隅に常にあったのは間違いない。

大半は引退し直接接する機会がぐっと少なくなったが、今なお不思議な印象を残す人が多い。職場にいないくなくても空気だけは残っている。つくづく不思議な内面的屈託を抱えているのは感じていたけれど、その理由が今さらながら本書を読んでわかった気がする。

タイトルから受ける印象以上に、本書は個人的な書物と言ってよいと思う。個人的と言っても悪ければ、一つの時代を生きた証言者としての責任の重さを踏まえて語られているという印象がある。

この種の社会論は多くの場合、一つの視点から滔々と自説を述べるものとなりがちである。「べき論」が多く、辟易さ

せられることも少なくない。

私は本書を最後まで一気に読むことができたのだが、読み終えて感じるのは、一貫して皮膚感覚が濃厚に維持されていることである。ある面で著者自らが

「熱」を感じさせる社会論

すべて手の内を明かしたうえで、逃げ場をもたないぎりぎりの局面で語られている。それに伴うリアリティがある。本書の構成が著しくユニークなのは、著者自身が青年時代に書いた社会論がそのまま転載されており、現代との類比的想像力が飛躍的に読者にもたらされるところにある。とくに学ぶところが多かった

のは、現在シルバー世代になった人々の価値観、あるいは生きているようなものが鮮やかに伝わってくるようなところにある。もともと早く知っておきたかったと悔やまれるほどに、敏感に伝わるものがあった。

誰しも、時間がたてば年をとる。現在の若者も数十年後には中年になり、老人になる。同じように、現在の中年以上の方々にも若い時代があった。そして、現在の価値観や感じ方の

大半は、若い時代に形成されたものである。

65歳以上人口が27%を占める世の中だ。しかも、若いころ熱い政治の季節を生きてきた人たちであるから、政治参加への意識は高い。ならば、現実の人口比以上の質的な発言力は圧倒的に高まっているはずであり、その認識が本書のスタートになるだろう。

言い換えれば、高齢者の価値観や認識に反する政策は採用されにくくなっているということであり、私たちはすでにシルバー・デモクラシーの世界を生きている。しかも、一貫して人口増加と経済成長を続けてきた日本社会にとっては、未経験の領域である。

ならば、まず考えるべきは、社会の手綱を握りつつある人々が何を望み、何を期待し、何を信じているのかを知ることである。しかも、想像することではなく、直接聞くということが大切である。

私自身、全共闘世代や団塊の世代の人々と一時はともに近しく接したけれど、若いころの話などはあまり聞いた記憶がない。恥ずかしかったのかかもしれない。少し距離を置いたかたちで、このように肉声に接すると、彼らが心に秘めていたものの重さというものが遅ればせながらわかる気がしてくる。文化というのは若者から発するとは限らない。稀に見る刺激的な書物である。



『二宮尊徳に学ぶ報徳の経営』

田中宏司 水尾順一 蟻生俊夫 編著
同友館 1900円＋税



小学校のころ、校庭の片隅に二宮金次郎の像があった。薪を負って読書をするおなじみの姿である。毎日目にするとなかなか気づけなかったのだが、今にして思えば偉大さはわかる。

現在評者は尊徳が活動したエリアに近接したところに住んでもいるし、隣町には彼が指導した事業所もある。常々思うのは、尊徳はいわゆる偉人というよりも、親しみある市井の思想家である。

大昔の篤農家との認識はもたれながらも、尊徳がすぐれたマネジメント思想家であったことはさほど知られていないかもしれない。

尊徳のワードの中には「至誠」「勤労」「分度」「推譲」など、現代社会でこそ復権に値する有効なコンセプトが多く見られる。

しかも、本書がみごとに展開しているのは、尊徳思想の継続性である。考えてみれば、江戸

時代に唱道された考え方が、現在にまでごく自然に引き継がれ、意識されている。しかも、きちんと機能している。驚くべきことである。少なくとも、他の農政家には見られないことかもしれない。

尊徳にあつては、経済と人生

が分離していない。それは一つのものである。

ならば、尊徳の基本思想や行動を考えるに当たっても、経済と人生を分けて考えることに意味はないということであろう。

本書は二部構成によるものだが、まずもつてその点に繊細な配慮が払われる。

ともに尊徳思想の普遍性に焦点が当てられ、たとえば、至誠

古くて新しい実践知の息吹

はコンプライアンスや顧客満足、勤労は従業員満足や危機管理、分度はコーポレート・ガバナンス、推譲は地域社会対応や社会貢献活動などといった具合である。私たちはつい欧文やカタカナで記される経営用語をありがたがるけれども、根本にながる考えは日本にも古くからあったのだと得心させられる。まさしく、尊徳の言動の中に普遍的な経営コンセプトが具現していたのだ。

第二部はとてもカラフルで奥行きがある。どのようにして江戸時代から明治、大正、昭和、そして現代にいたるまで報徳思想が継承されてきたか、新鮮な実像がいきいきと展開される。

たとえば、洪沢栄一のような実業の巨人は言うに及ばず、真珠王の御本幸吉、力織機の豊田佐吉、雪印のもとをつくった黒澤西蔵、松下幸之助、経済

リーダーだった土光敏夫にいたるそうそうたる経済人群像である。いずれもが、現在にいたるも生きて継承されている。その点をきちん意識すべきなのだと思う。

私たちはつい第二次大戦より前は、遠い外国のように、なじみのないものと感じてしまいがちである。昭和から明治にかけても想像力はなかなか及ばないし、江戸時代ともなれば、太陽系の果てを想像しろと言われるようなものだ。

けれども、歴史とは連綿と継続していくものである。私たちの社会や生活の中に入りこんでいるものである。本書は二宮尊徳を素材に、私たちの生活に無意識に入って機能している考え方の存在に気づかせてくれる。

もちろん外国の学者や実践家が提唱する理論も魅力的ではあるし、学ぶべきところも多いだろう。だが、まず足下にある知の遺産に目を向けることもとても大切なことのように思われる。